

研究結果

本研究は、韓国の三世代（旧世代である7～80代、50代、新世代の20代）にわたり大がかりな「日常生活における日本語語彙の使用実態調査」を行い、その資料の分析を通じて、近年ほとんど取り上げられることのない「以前使われていた日本語語彙の残存率」や、「現在使われている新日本語語彙」の種類や使用率などの一端を明らかにしようとするものである。

研究方法としては、3回にわたる「自由記入方式」調査（大学生70人）と、「質問紙法」調査（3世代にわたる日本語学習者と非学習者各々100人ずつ総勢600人）を行い、その調査結果を分析した結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 自由記入式調査の結果、延べ語数が510語で、一人当たり使用語は7語である。最も使用率の高い上位5つの「既存の日本語語彙」は、たくあん、玉ねぎ、おでん、すし、爪切りである。新日本語使用語彙の上位5つは、しゃぶしゃぶ、たこ焼き、ラーメン、おたく、いじめであった。いずれも料理、食品関連の語彙が多いことが分かる。
- 2) 質問紙法調査では、延べ語数が、7～80代の日本語学習者では7,306語、非学習者で7,453語、50代の日本語学習者は7,593語、非学習者は7,916語で、20代の日本語学習者は4,924語、非学習者が4,543語であった。この結果から、50代の非学習者が最も日本語語彙使用率が高く、20代において以前使用されていた総語彙の残存率の程度は65%余りであることが分かった。
- 3) 134の異なる語彙の中で、50%以上の残存率を示す語彙は、7～80代の学習者35.1%、非学習者21.6%、50代学習者24.6%、非学習者35.1%、20代学習者10.4%、非学習者11.2%となり、世代間の差が大きいことが分かる。全世代をとおして最も使用率の高い語はうどん84.3%、豚カツ/おでん82%、しゃぶしゃぶ79.7%、わさび76.7%であった。
- 4) 134語の中で10%以下の残存率を示した語彙は、70～80代の学習者ではなく、非学習者では2語、50代学習者では4語、非学習者5語で、20代学習者は34語、非学習者では40語であった。これは20代においては、以前使われていた日本語語彙のうち、25.4～29.9%が現在では使われていないことを意味する。

最後に、韓国語の中で日本語語彙を混ぜて使用することに関連して行った意識調査の結果では、「日本語の語彙をどこでどのように学習したのか明確に覚えておらず、自分でも意識せずについ使っていることが多く、このことに関して、特に抵抗感を感じない。」という回答が多かった。しかし、20代では、将来自分の子供には使わせないと述べている被験者が62%に及び、新しい日本語語彙の流入が多い一方、既存の日本語語彙は衰退しつつあることが明確になった。

以上の結果から、日本語使用第一世代である7～80代、彼らの子供世代の50代という旧世代と、50代の子供に当たる新世代の20代の「以前使われていた134語の世代別残存率」が具体的に明らかになった。さらに、彼らの日本語語彙使用意識も理解することができ、将来予測もある程度可能になったと言えよう。これが本研究の成果である。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「韓国における日本語語彙の使用実態－
旧世代と新世代の比較研究」、鄭恵卿、『日本文化研究』 第36輯、東アジア日本学会
学術誌、2010. 10、pp.433～460

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)